

〈特 集〉

東京オリンピック・パラリンピックにおけるドーピング検査員活動報告

夏井 裕明

(日本女子体育大学健康スポーツ学科教授, 基礎体力研究所兼任研究員)

1. はじめに

筆者は、2021年7月から9月にかけて、東京を中心として行われた第32回オリンピック競技大会夏季大会ならびに第16回パラリンピック競技大会夏季大会に、ドーピング検査員として計25日間参加しました。これまでの経緯と活動を報告します。

2. ドーピング検査員としてのこれまでの活動

2002年に日本アンチ・ドーピング機構 (Japan Anti-Doping Agency : JADA) が設立された際にドーピング検査員 (Doping Control Officer : DCO) としての活動を始め、毎年10~20件程度のドーピング検査に対応してきました。2018年からは血液採取担当者 (Blood Collection Officer : BCO) としても活動しています。DCOの役割は、競技会検査 (In Competition Test : ICT) ならびに競技会外検査 (Out of Competition Test : OOCT) において、検査対象選手に対する通告、採尿と封印、書類作成で、BCOの役割は採血と緊急時対応です。

3. 東京オリンピック・パラリンピックにおけるドーピング検査数とそれに対する準備

2019年度に行われた日本国内におけるドーピング検査数は約7000検体 (ICT約4000検体, OOCT約3000検体) ですが、オリンピック・パラリンピックでは約1か月半の期間中に約8000検体のドーピング検査が予定されました。このため、日本国内で活動しているDCOとBCOでは到底対応が間に合わないため、

2つの対応策が取られました。1つ目は、海外からDCOの派遣を受けることで、これまでのオリンピック・パラリンピックでも行われてきた対応です。2つ目は、日本国内で英語に堪能な人を一時的なDCO (国際総合大会DCO) として養成するという事です。この国際総合大会DCOの養成は2018年度から始まり、筆者もその養成講習会の講師を3日間努めました。

従来から活動しているDCOも全員が英語に堪能というわけではありませんので、希望者のみがオリンピック・パラリンピックのDCOに応募しました。もちろんe-Learningによる英語学習とテストを受けて、オリンピック・パラリンピックのDCOに採用されています。このようにして、オリンピックでは国内DCO152名とBCO32名の計184名に加えて海外DCO106名の計290名体制、パラリンピックでは国内DCO151名と国内BCO14名の計165名と海外DCO59名の計224名体制で約8000検体のドーピング検査に対応しました。

4. ドーピング検査室の体制

ドーピング検査室の体制は、ドーピング・コントロール・ステーション・マネージャー (Doping Control Station Manager : DCSM), シャペロン・コーディネーター (Chaperone Coordinator : CC), DCO, BCO, シャペロンで構成されています。DCSMはドーピング検査室の責任者で、主に海外からのDCOが務めていました。CCはDCSMを補佐し、シャペロンの指導をしながら検査通告を補助し、さらには

ドーピング検査を受けた後の選手の輸送手段の調整も行う役割で、主に国内の DCO が務めていました。シャペロンは一般から応募があったボランティアで、その役割は選手への検査通告から選手の行動の監視です。ドーピング検査室の規模にもよりますが、10名から50名体制でドーピング検査に対応しました。

5. ドーピング検査活動場所

筆者はオリンピックで13日間、パラリンピックで12日間ドーピング検査に対応しましたが、活動場所は様々でした。晴海のオリンピック選手村・パラリンピック選手村、日本武道館、国技館、オリンピックスタジアム、大井ホッケー競技場、東京国際フォーラム、幕張メッセで活動しました。さらに神奈川県相模原市で外国選手が事前合宿を行っている場所に向向いての OOC もありました。これらの活動場所は事前にシフト表で告知されていますが、場合によっては前日夜に「明日どこどこに行ってもらえませんか？」という連絡を受けて急遽追加・変更されることもありました。活動時間帯も早朝5時から始まる日もあれば、検査が長引いて日付をまたいだ1時過ぎに終わることもありました。

6. 海外からの DCO

海外からの DCO は選手・役員とは異なり、プレスやメディアと同様入国後14日間の自主隔離が適用されます。もちろん自国に帰国後もその国のルールに従って隔離されますので、オリンピック・パラリンピックでの活動期間加えると最低2か月以上の休暇が必要となります。それでもオリンピック・パラリンピックに関わりたいたいという崇高な意思を持った DCO がボランティアで来日して下さったのですから、本当に頭の下がる思いです。海外からの DCO の国籍は43か国にもものぼります。

7. ドーピング検査員として苦勞したこと

ドーピング検査の手順自体は全世界共通です

ので、特に困ったことはありません。英語にも特に苦勞はしませんでした。しかし国籍の違う DCSM や DCO と一緒に活動するというのはやはりストレスでした。特に仕事に対する責任と役割の考え方にギャップを感じました。一例を挙げると、オリンピックスタジアムでの出来事です。オリンピックスタジアムでの陸上競技は、日中の暑さを避けるため朝の部と夜の部に完全に分かれていました。朝の部は12時頃終了、夜の部は19時開始です。クーリングダウンとウォーミングアップに要する時間を考慮してオリンピック選手村との間の輸送バスの運行スケジュールが組まれますが、それでも運行されない時間帯が生じます。ICT は競技終了後に行われ、選手の尿意に左右されるため検査終了時刻は予想が付きません。そのため輸送バスの運航時刻表を確認して間に合わないようであれば、予め組織委員会の輸送担当に連絡して組織委員会が運用する自家用車の手配を依頼します。その自家用車も1か国の選手・役員に対して1台手配するルールになっています。選手と役員はこの組織委員会が提供する輸送バスか自家用車以外で移動することができません（いわゆるバブル方式）。その日も何件かの検査が延びていましたが、輸送バスの時刻に間に合わない選手と役員が6名（3か国）出ました。そのうちの1か国の選手と役員を組織委員会が手配する自家用車の乗り場に送っていくと、何とすでに検査を済ませて輸送バスに乗っているはずの選手と役員が居ました。理由を尋ねてみると、記念写真を撮ったりしているうちにバスに乗り遅れてしまったとのことでした。すぐさま DCSM（スコットランド人）にトランシーバーで連絡を取ると、「バスに間に合う時間に検査が終了したのだから、乗り遅れたことについて我々には責任がない。夜の部の選手を送って来るバスまで待たせれば良い。今から輸送手段をアレンジするのは君の仕事ではない。」との返事です。しかし炎天下の絵画館前で2時間以上も次にやって来る輸送バスを待たせるのは、「お・も・て・な・

し」をモットーとする日本人には許せないことです。DCSM としばしのやり取りの後、「好きにしろ」とのありがたいお言葉をいただき、最後に自家用車乗り場にやってきたアメリカの選手と役員のために手配した自家用車に同乗させてもらい、乗り遅れた選手と役員を無事選手村に送り出すことが出来ました。

8. ドーピング検査員として学んだこと

オリンピック・パラリンピックを通じて、数多くの国々の選手・役員・DCO とお会いすることができました。そのほとんどがこれまで行ったことがない、またこれからも行くことがないであろう国の人々です。それらの人々と会話をしていると、人間の本質は世界共通で、親切にすれば親切が返って来るものだということを学びました。パラリンピックでも様々な障害（視覚障害・運動機能障害・発育障害）をもった選手に出会いました。彼らに共通して言えることは、自ら工夫を積み重ねて生きていること、健

常者の少しの手伝いや気配りがあれば十分社会生活が送れることです。

9. おわりに

前回の東京オリンピックでは、母親に連れられて聖火を見に行くと聞かされていますが、筆者には記憶がありません。今回の東京オリンピック・パラリンピックでは、25日間という期間でしたが思い出深い活動ができました。その間、国内では新型コロナウイルス感染症の第5波に飲み込まれ、学生支援課や健康管理センターからの体調不良者の報告に対して迅速に対応ができずご迷惑をおかけしたことを、この場を借りてお詫び致します。

文献

2021年度 更新講習 E ラーニング【DCO向け】：
<https://eden.ac/textSectionRead?sectionid=537701&assignmentid=63753#537701> (2021年12月7日参照)